

de la Mare の短編小説における 舞台装置に関する一考察 —— 窓 ——

Windows: A Study of the Settings of Short Stories by Walter de la Mare

鬼塚 雅子
Masako Onizuka

This paper deals with one of the important settings in Walter de la Mare's short stories: windows. De la Mare was fascinated by windows, which can show the other side of things or the inside of the human mind. This paper explains the roles windows play and the influence they have on the characters in his short stories.

はじめに

目は心の窓という言葉をよく聞くが、窓は家屋にとって目といえる機能をもつ。目が人間の心と外界を結びつけているように、窓は家屋の内部と外部世界を結びつけ、両者の交流を可能にしている。窓のもつ最も単純な働きには、内部空間の照明や換気に役立つこと、内部空間から外部世界を観察できることがある。ガラス窓ができる以前から覗き穴というものが存在し、これを通して、人々は脅威的となるかもしれない見知らぬ者の接近に焦点を合わせつつ、家屋の周囲を見渡すことができた。¹⁾ さらに窓には、そのガラス面に人や物の姿を映すという働きもある。この点において窓は鏡とほぼ同じ機能をもつといえる。

ドリス ロス マクロッセン ウォルター・デ・ラ・マア
Doris Ross McCrosson も指摘しているように²⁾、Walter de la Mare の短篇小説では、彼独特のゴシック的雰囲気をかもし出す舞台装置として、鏡と窓と肖像画が重要な役割を果たしている。その中の窓に焦点を絞り、de la Mare の短篇小説における窓のもつ舞台効果や登場人物の内面に与える影響について考察するのが本稿のねらいとするところである。

1. 窓から外を見る

窓から外を見るというのは人間のごく自然な行動の一つである。人間が窓のない空間内に存在することは、閉じこめられることを意味する。そのとき人間は自由を求めて外を見よう、外へ出ようと抵抗する。

オットー フリードリッヒ ボルノウ
Otto Friedrich Bollnow によれば、「見られることなくして見ること、この用心深い生命保全の根本原則は、窓の場合に、その最も純粋な形をとって具現化されている。——（中略）——最初は危惧の念から生じた周囲の世界の観察がより一般的な観察の喜びに席をゆずる（以下略）。」³⁾ そのため、子どもの中には、自分自身は隠れたままで、そこから自分のまわりの世界を気づかれずに観察しうる隠れ場所を求めようとする欲求が深く根づいており、そのような隠れ場所の中で夢みながら、子どもは何ともすばらしいやすらぎの幸福を感じるのだという。⁴⁾ 次にあげる de la Mare の詩は、そういう子どもの姿と気持ちを適確に表現している。

The Window

Behind the blind I sit and watch
The people passing — passing by ;
And not a single one can see
My tiny watching eye.

They cannot see my little room,
All yellowed with the shaded sun,
They do not even know I'm here;
Nor'll guess when I am gone.⁵⁾

この詩の“ I ”のような子どもは、窓から外を眺めているうちにいつのまにか白昼夢におちいってしまう。自分の存在している現実である窓の内側の寂しい空間から、美しく見える窓の外の高い世界へ入ることを望んでいるのである。

“Selina's Parable”のセリーナ(Selina)は、小さな窓から外の農家の庭を見ていると、

心がなごみ、一種の亡我状態に陥る。彼女の心が窓の外に光景に夢中になっているとき、その瞳は「小さな黒い水たまり」(“two small black pools of water”⁶⁾)に例えられている。つまり水鏡のように外界の姿を克明に映しているのである。実際、セリーナの眼を通して描かれる庭の状景は入念である。まさにセリーナはボルノウの語る子どもそのものである。

窓の外を眺めるセリーナが恍惚状態にあるのと同様に、“Alice’s Godmother”の少女アリス(Alice)も窓辺で跪いて外をぼんやり見ているうちに、たった一人で初めて名づけ親に会うという緊張感がほどけ、落ち着きを取り戻した心はいつしか白昼夢の中へ滑り込んでいく。

In this room a low recess filled the shallow bow window and on this lay a strip of tapestry. The leaded pane of the window was open. Alice knelt down at the window; and her mind slipped into a day-dream, and her gaze wandered far away....

The thoughts that had all day been skittering in her mind like midges over a pool, gradually fell still, and she sank deeper and deeper into the hush that lay over the ancient house. It was as if its walls were those of an enormous diving-bell sunken beyond measure in the unfathomable ocean of Time.⁷⁾

“Miss Jemima”の小さなスーザン(Susan)は一人ぼっちで誰にもかまってもらえずにいる。彼女の世話を任されている家政婦のミス・ジマイマ(Miss Jemima)は、冷たい高圧的な態度でスーザンに接する。母と別れて伯父の家に引き取られ、遊び相手もないスーザンは、いつも一人で本を読んだり、窓の外を眺めたりしていた。時には窓から乗り出して外を見ることもあった。窓の外に広い世界を眺めることがスーザンには大きな慰めだったのである。だが、大人目からみたスーザンは、陰気くさく、ばかげた考えで頭をいっぱいにした風変わりな子どもであったに違いないと、スーザン自身が約75年後に孫娘(やはり名はスーザンである)に語っている。

このスーザンを男の子に置きかえたのが“The Princess”に登場する少年(名前はない)である。少年もまた、誰にもかまってもらえず、一人寂しい毎日を過ごしている。彼は古い家の窓ガラスに鼻を押しつけて、始終立ちこめるスコットランドの霧を通して窓の

下の荒涼とした景色を見おろしているうちに、自分の想像力が創りだした空想のプリンセスに恋をしてしまう。

“The Almond Tree”のニコラス(Nicholas)少年も窓の外を見ている。ニコラスには両親がそろっているのだが、父親は若い愛人のもとへ通い、残された妊娠中の母親はいらいらしており、二人とも息子の気持ちを理解してやる余裕がない。夫の浮気に苦しむ母親に八つ当たりで叱られたニコラスは、籐椅子の上に膝をついて、窓の外の夜の雪景色を眺めることで心を落ち着ける。ニコラスは静寂の中、飽きることなく、膝が痛みだすまで外を眺め続けるのである。

“Visitors”の少年トム(Tom)はその身体の障害——幼い頃の怪我のため左腕が使えない——から同世代の男の子と遊ぶことをせず、一人ぼっちで考えごとばかりしていた。トムは月が照っているときに窓の外を眺めるのを特別楽しんだ。月は始終形を変えるので見飽きることがないからである。風変わりな子どもであるトムは、奇妙な習慣から、寝室から階下へ降りるとき、いつも狭い階段に少しの間座り込んで、踊り場の高い窓から庭を見おろした。そのとき何か思いもよらないものが見えるような気がするのだが、実際には普通と違うものが見えたことなどは一度もなかった。もう一つの奇妙な癖は、古い牧師館の下にある地下室の入口の前を通るときに、必ずかがんで鍵穴を覗きこむことだった。ガラス窓ができる以前には覗き穴がその代わりをしていたわけだから、トムが覗く地下室にとって鍵穴は窓と同じとみなすことができる。このトムの行為は窓の内側を外から見ることになるのだが、自分のいる空間から別の空間を覗きこむという点では、ガラス窓を通して外界を眺める行為と変わりはないものと考えられる。

上記の子どもたちは皆、自分たちのおかれた状況に満足していない。そこで「何か」を期待して窓の外を見るのだが、実際には何も変わったものは見えない(但し、スーザンだけは不思議な体験をするのだが、そのことは後で述べることにする)。それにもかかわらず、子供たちが窓の外を眺めているうちに夢の世界に浸ってしまうのは、外の美しい自然の光景プラス自己の豊かな想像力のなせるわざである。眼は外を向いていても、心はいつのまにか自己の内部へ入りこんでしまう。そしてしばらくするとまた現実の世界へ戻る。言わば、2つの空間——夢の世界と現実の世界——の間を行き来していることになる。もともと窓を通して外を眺めるということは、身体を家の中という限定された空間の中に置きながら、外界という果てしない空間に眼を向けることであるから、心が2つの空間の間を移動することは決してむずかしくないのである。

窓の外を眺めるのは子どもだけではない。「成人は、自己の引きこもっているところの空間から、同時に外部世界を目にとめておきたいという欲求を感じている。」⁸⁾

“The Face” のノラ (Nora) は結婚を間近にひかえた若い女性だが、まるで少女が夢みるように、ぼんやりと窓の外を見つめている。彼女は白昼夢に浸りながらも、眼下の長方形をした裏庭で起こっていることには残らず気がついている。

「窓から外を眺めること」は、先に述べたように、子どもにとっては無邪気な喜びや心のやすらぎを得ることを意味するが、大人にとっては寂しさを感じる場合もある。なぜなら、「彼 (=成人) は窓から、明るく輝いて眼前にひろがっている世界を見るが、しかし世界は、部屋の暗がりに隠れている彼を見ない」⁹⁾ からである。確かに、“The Riddle” のおばあさんを世界は見えていない。おばあさんは長い一日をずっと張り出し窓のところに座り、唇をすばめ、かすんだ眼で、人々と車が行きかう道を詮索するように眺めている。おばあさんの年老いた眼にはこの世のものは何一つ映っていないようだが、心の中にはいろいろな思い出がもつれあっている。「思い出」という「部屋の暗がりに隠れている」おばあさんは、世界から忘れられた存在になっているのだ。

“Broomsticks” の一人暮らしの老婦人ミス・チョーンシー (Miss Chauncey) は、長い間「部屋の暗がりに隠れている」自分に気づかずに生きてきた。ところが年老いてくるにつれて、一人で荒野の中で暮らす孤独感やそのまま死んでいく恐怖感に怯えるようになる。そういう自分の本心を、頑固なミス・チョーンシーはなかなか認めようとしない。そのせいでだろうか、彼女の回りでは窓辺のところで聞こえる “Wh-ssh! Wh-ssh!”¹⁰⁾ という不思議な音、飼い猫サムが見せる不審な行動 (彼女は猫が自分を裏切ろうとしていると思いこむ) などの不可解な現象がたびたび起こる。やがて彼女は自分の生活に嫌気がさし、その家を出て義妹のもとへ行く。それはまるで「部屋の暗がり」から脱して、明るい窓の外に身を乗り出す行為のようである。思いきり大きく窓を開いて外へ眼を向けることは、その人間が社会という大きな秩序の中へ組みこまれることであり、安心感をも伴うものである。

窓から外を見ることには本人が気づかないうちにも様々な意味を含んでいる。次に挙げる “The Looking Glass” のアリス (Alice) の心理には普通の人間の理解を超えたものがある。

“.... I get out of bed at night to look down from the window and wish myself here. When I'm reading, just as if it were a painted illustration —— in the book, you

know —— the scene of it all floats in between me and the print. Besides, I can do just what I like with it.... ”¹¹⁾

2. 窓に背を向ける

窓から外を眺める行為が、その人間が社会の秩序の中に組みこまれ、心を世界に対して開くことを意味するのなら、窓に背を向けて外の光景に目をつぶる行為は、その人間が外界との接触を拒み、周囲に対して心を閉ざしていると言える。

“Miss Duveen”の主人公の少年の祖母は、いつも老いた無表情な顔をして、部屋の窓に背を向けて座っている。一緒に暮らしている孫息子にやさしい言葉をかけることもしない。死を真近に迎えようとしている老女には外界に心を奪われるものは何もない。孤独な狭い空間の現実には十分満足しているのである。

“The Face”のラストシーンでは、婚約者ノラの不思議な体験とそれについての彼女の気持ちをどうしても理解できないジョージ (George) がノラの家から去っていく姿が描かれている。明りがちらちらするカーテンをひいた窓を眺めた後、背を向けて立ち去るジョージは恐らくノラと結婚しないであろう —— 2人の間に明るい窓のある家庭は存在しないだろうという予感が読み手の心に残る。

また、窓に背を向ける行為が真実から目をそらす、あるいは真実を知らされずにいる状態を暗示している場合もある。作品の大半が母と娘の会話で構成されているユニークな短篇“The Stranger”は、少女シーラ (Sheelagh) が真昼の日ざしが差しこむガラス窓に背を向けてピアノの前に座っているシーンで始まる。シーラは実の父が生きていることを母親から知らされていない。しかしある日、電車の中で偶然(と思われる)出会い、やさしく話かけてきた男性はもしかしたら彼女の父親ではないかという疑問を読者に与えるが、de la Mare 独特の手法により、真相は最後まで明かされない。明るい日光がふり注ぐ窓に背を向けているシーラの姿は、真実を知らされていない少女の状況を暗示しているものと考えられる。

3. 窓が開かない

“The Dutch Cheese”のジョン (John) はいたずら好きな妖精たちに悩まされている。彼は両親が失踪してしまったのは妖精のせいだと堅く信じ、次第に気難しく、ふさぎこむ

ようになる。頑固なジョンが妖精を憎めば憎むほど、妖精たちは彼に様々ないたずらをしかけてくる。そしてついに堪忍袋の緒が切れたジョンは、豆と水の入った鉢を妖精の顔をめがけて投げつけてしまう。するとあたりが静まりかえり、翌朝になってジョンが四角い窓の外に目をやっても何一つ見えなくなる。窓を押し開けようとするがびくともしない。妖精の魔力で豆が水を吸って一晩のうちにびっしりと茂り、緑色の日よけのようなもの（“a deep, clear, green shade”¹²⁾）が壁のようにジョンと妹の住む小屋を覆っていたのである。

.... All was pitch-black and now all was utterly silent. There wasn't a whisper, Only desolate silence. And John at last could endure his fears and suspicions no longer. He got out of bed and stared from his square casement. He could see nothing. He tried to thrust it open; it would not move. He went downstairs and unbarred the door and looked out. Like Jack's beanstalk, in one night had grown up a dense wall of peas. He pushed and pulled and hacked with his axe, and kicked with his shoes, and buffeted with his blunderbuss. But it was all in vain.¹³⁾

ジョンにしてみれば人生最大の恐怖体験だが、第三者には滑稽な出来事である。

「窓が開かない」という現象は、実はジョン自身の他人を受け入れようとしなない頑な心そのものだと解釈できる。なぜならジョン自身が投げた豆が日よけのような壁を作り、窓を開かなくしているからである。妹と二人だけで大きな森の外れに住むジョンは、他人と交わる社会生活を営むことを拒否している偏屈な男である。彼が心を許し、愛するのは妹だけである。しかしジョンはそのような自分を間違っているともおかしいとも思っていないし、気づこうともしない。最初は豆のように小さい頑固な心でも、憎しみという水を吸うことによって膨らんで大きくなり、やがて周囲を見えなくする壁になってしまう。そこでジョンは押しても引いても窓が開かないという最悪の事態を迎えることになるのである。まさに窓は心の目だと言えよう。

4. 窓が閉じている

開けようとしても窓が開かないとき、人間は窓の内側にいる。だが、閉じている窓を見上げるとき、あるいは閉じている窓が人間を見おろす場合は、人間は窓の外側、つまり外

部空間に身を置くことになる。

“Miss Jemima”のスーザンが、引き取られている伯父の家の窓を外から見上げたとき、窓と窓のカーテンがすっかりおろされていた。その瞬間、スーザンにはそれが何を意味しているのかわからなかったが、何か悲しい出来事が起こったことは子ども心にも察知でき、恐ろしい痛みに襲われた。スーザンには窓がまるで眼を閉じて、彼女を見ないようにしているかのように感じた。 (“Besides, they (= the windows) seemed like shut eyes, refusing to look at me (= Susan).”¹⁴⁾) まもなくスーザンは、自分を愛してくれた伯父の死に目に自分が間に合わなかったことを知る。伯父の死と、死によって外界ともスーザンとも二度と接することができなくなった伯父の心、つまりこの世に対する拒絶がカーテンによって窓を閉ざすことになったのである。

スーザンは自分の我がままな振る舞いから、死ぬ直前に自分に会いたがっていた伯父に会えず、その許しを請うこともできなくなったことを悟ると、後悔にさいなまれ、周囲に対して（といっても家政婦のミス・ジマイマしかいないが）ますます心を閉ざしてしまう。葬式の日、棺の中に横たわる伯父の前へ連れて行かれたスーザンは、自分を責める気持ちから伯父の死を認めることができず、どんなに家政婦のミス・ジマイマになだめられたりすかさされたりしても、その眼を開けようとしなかった。家がその眼というべき窓をスーザンに対して閉じてしまったショックが、彼女の心の窓である目を閉ざしてしまったといえる。

“Miss Jemima”以外にも、de la Mareの描く閉じた窓や、錠戸やカーテンのおりて、いる古い家には死の臭いが漂っている。

“The Count’s Courtship”の最後の場面で、主人公のルーシー叔母 (Aunt Lucy) がかつて彼女に求婚していた伯爵の邸を訪ねると、^(ブラインド) 日よけが全部おりていた。伯爵はすでに死亡していたのである。もう若くはないルーシー叔母は自分にも降りかかってきそうな死からのがれようとして、あわててその場を立ち去る。ルーシー叔母はほとんど失明状態にあるが、それでも、いやそれ故に死の臭いを鋭敏に感じとる。

... she (= Aunt Lucy) cried with a shrill piercing horror in her voice. “Agnes (= the maid), Agnes — is the house *dark*?”

“The blinds are all down, m’m,” answered the girl looking out of the window (= the cab’s window).

My aunt turned her head slowly, And then she began to climb rapidly backwards down the steps in her haste to be gone. It was a ludicrous and yet a poignant and dreadful thing to see. I (= Lucy's nephew) could refrain myself no longer.

But she was already seated in the cab before I could reach her. "Aunt, my dear Aunt Lucy," I said at the window, peering into the musty gloom.

She turned and confronted me, in very speechless entreaty in her blind face — ..., with an extraordinary certainty of aim, she began beating my hand that lay upon the narrow window – frame with the handle of her ebony stick.¹⁵⁾

上述の "the narrow window – frame" は馬車の窓枠である。ルーシー叔母は死を恐れて、馬車の窓の内側の世界へ逃げこんでしまったのである。そして狭い窓枠にかけた甥の手を黒檀の杖の柄で打ち据えたのは、邸から彼が運んで来た死の臭いを払いのけるためだったのだろう。だが伯爵の邸から逃げ出したものの、ルーシー叔母の存在する世界も決して明るくはない。言わば "the musty gloom" である。

"The Princess" に登場する少年が、心に描く理想のプリンセスが住むと信じている古い家を訪れたとき、ほとんどの窓には鎧戸がおりており、上方の 2、3 の窓にはカーテンがかかっているだけだった。少年が一目見ただけでも、その家が —— 少なくとも最近の何年間かは —— 幸福な人々を住ませたことのない場所であることは明らかだった。かび臭く、火の気はなく、時計は止まっていた。そうひどくはないが、おそろかにされたような、荒れたようすがあり、少年には打ち捨てられたように見えた。二度目の訪問（といっても二度とも勝手に侵入したのだが）のとき、少年は持主の老婦人に出会う。蒼ざめた顔に厚化粧をして、飢えた猫のように痩せた老婦人を見て、少年は "God only knows I had never encountered a human being before that in some respects looked less dead, and yet so perilously near it."¹⁶⁾ と感じ、眼の中に苦痛と嫌悪が浮かぶのを隠そうと顔をそむけた。

そのほとんどが閉じており、閉じていないところにもカーテンがかかっているという窓の状態は、世間との交際を断ち、現実に対してほとんど拒絶した心で、死を迎える気持ちの準備のできている老婦人の姿そのものである。

5. 窓が見おろしている

4で扱った窓は登場人物の心情や姿を表現しているが、それは de la Mare の作品では家そのものが人間のように扱われることが多いからである。その場合、窓が目としての機能をもつことは言うまでもない。

“Alice’s Godmother”では、家が持主である^{ゴッドマザー}教母様に代わって、訪問者アリスを観察している。それを感じとったアリスは、たくさんの窓のどれかから姿を見られるよりも前にもっとよく家の様子を見ようとして立ち止まる。

Presently after, indeed, the House itself appeared in sight. . . . Alice paused again behind yet another of the huge grey boles to scan it more closely before she herself could be spied out from any of the many windows.¹⁷⁾

“Lucy”に登場する未婚のマクナッカリー家の三姉妹 (the Miss MacKnackerries) の住む家である石の家 (Stoneyhouse) は、外から一目見ただけできちんと片づいているのがわかる、何もかもアップルパイのように整然とした家だった (“everything was in apple - pie order”¹⁸⁾)。そのたくさんの窓はぴかぴかに光って、カーテンのまっすぐなひだの列を後に従え、“Find the faintest speck or smear or flaw in us if you can!”¹⁹⁾と言わんばかりにじろじろと人間たちを見おろしていた。そして主人公の末娘ジーン・エルスペース (Jean Elspeth) たち住人に対しても挑戦的で、時には馬鹿にしたような威圧感を与えた。

The bright light from the sky streamed down upon the house, and every single window in the high white wall of it seemed to be scornfully watching Jean Elspeth as she made her way down to a little straight green seat under the terrace.²⁰⁾

こうした窓と石の家の描写は、没落前のマクナッカリー家、といってもジーン・エルスペースの二人の姉ユーフェミア (Euphemia) とタバサ (Tabitha) の姿にだぶらせることができる。二人は気品はあるが、いかめしく、プライドが高く、周囲の人たちを見下した態

度をとることがあった。

ところが、一家が破産を宣告され、没落の道を辿りだすと、それに比例するかのように家も崩れていく。しかしおもしろいことに、石の家の変化には、風変わりでわくわくするようなことも含まれていた。たとえば、数ある窓の中で、階段の下方にある窓の一つが壊れると、春には恋人同士の駒鳥がそこに巣を作り、ジーン・エルスペースは駒鳥の家族全員の親友となった。また、靴入れの戸棚の通気窓は開いたままで、その中にはいつのまにかセンニンソウが蔓を伸ばし、見事な茂みになって花をつけ、蝶が一匹やってきてその蜜を吸っていた。この二つの窓の描写は、すっかり貧しくはなったが、精神的には落ち着いて、充実した明るい日々を送るジーン・エルスペースの小さな幸福とも言える生活を表している。

さて三姉妹が石の家を去ってから数年後、今では腰の曲がった老婆になったジーン・エルスペースが石の家を訪ねると、たくさんの窓はほこりまみれになって、今ではもう厳しくにらみつけることはなく、まるで眠ったまま歩いている人の目のように曇っていてうつろだった。 (“the windows of the great house did not stare so fiercely now; they were blurred and empty, like the eyes of a man walking in his sleep.”²¹⁾)

そこに住んだ人間と同様に家も変化を続け、最後には両者とも若さと美しさを失った代わりに、やすらぎを得られたのである。

All this while she (=Jean Elspeth) had been utterly alone. It had been a dreadful and sorrowful sight to see the great house thus decaying, and all this neglect. Yet she was not unhappy, for it seemed with its trees and greenery in this solitude to be uncomplaining and at peace. And so, too, was she.²²⁾

6. 窓に顔が映る

人の姿、とくに顔を映すという点で、鏡とガラス窓は同じであり、de la Mare の作品では両者は同じ機能をもつと考えられ、McCrosson もそう指摘している。²³⁾ この両者を巧みに扱っているのが短篇 “Physic” である。

夫が不在の毎週水曜日の夕食時に、エミリア (Emilia) は幼い息子ウィリアム (William) と台所で夫婦ごっこをしている。ある晩 2 人でゲームに興じているうちに、ウィリアムが急に発熱し、それまでは外が暗くて窓には何も見えないと言っていたのに、日よけをおろ

してほしいと母親に頼む。窓ガラスに映る自分を見るのが嫌なのだという。ウィリアムはなぜ窓に恐ろしい顔が現れるのかときくが、エミリアには理解できない。やがて帰宅した夫エドワード (Edward) も頭痛がして寒気がすると言う。そして鏡に映る悪夢のような顔を見る。2人がそれぞれ窓と鏡に見る恐ろしい顔が、後に往診にやって来るウィルソン (Wilson) 医師の顔らしいことは作品の中で暗示されている。息子ウィリアムの顔は医師に似ているし、エミリアは台所の夫婦ごっこでウィリアムに医師の役もさせている。また、夫は浮気しており、エミリアはその証拠を寝室で見つける。

de la Mare の作品らしく、この短編も読者が抱く疑問に明確な答えが出ないまま終わっている。だが、Edgar Allan Poe を思わせるウィリアムとウィルソンという2つの名、「夫は人生ではさほど重要ではない。子どもはもっと大事で、よく面倒を見なくてはならない」 (“Husbands, of course, are not really of much importance in life —— not really. Necessities perhaps; but here to-day and gone to-morrow, *Children* are what the kernel is to the nut; the innermost part of it. And so must be taken great care of.”²⁴⁾) という医師の言葉から、エミリアとウィルソン医師、医師とウィリアムの関係がぼんやりと浮かびあがってくる。最後のシーンは往診をすませた医師が家を出ていくところだが、そのとき彼は壁にかかっている鏡に自分の姿を映し、「誰も起こさず、医師の薬を与えるだけにすることが賢明だ」 (“it’s wiser never to wake *anybody* up, merely to give them physic—— even mere doctor’s physic.”²⁵⁾) とエミリアに声をかけ、エドワードとウィリアムの死をほのめかすような恐怖感を後に残す。

ファウスト博士を思わせるウィルソン医師に対して、ウィリアムとエドワードは無意識のうちに恐怖心を抱いていたに違いない。2人が窓と鏡に見る恐ろしい顔がそのことを証明している。なぜなら鏡は —— 文学作品の中においてだが —— 「外界に実在する物体を反映もするが、同時に、外界に実在せず、むしろ鏡に向き合った人間の内面にひそんでいる何物かを喚起する」²⁶⁾ からである。しかもこの作品では窓は鏡と同じ機能をもっている。

“‘What Dreams May Come’” の主人公エメリン (Emmeline) は目がさめると一人でバスに乗っていた。そしてバスの窓ガラスに映る自分の顔すなわち “her pale and solemn face —— ‘a nice tidy face’, as a friend had once summarized it”²⁷⁾ を見る。ところがこの窓に映った彼女の顔は、他に乗客のいないバスの中で、彼女以外のもう一つの映像、すなわち別の顔に微笑んでいるのである。

Alone! Why, but an instant before, that faint image of herself had been smiling at another reflection beside it in this very glass! ²⁸⁾

And yet again those dark reflected panic-stricken eyes in the glass encountered her own; ²⁹⁾

エメリンは自分がどこから来て、どこへ行くのかわからないままバスを降り、鉄の門のある古い家へ入って行く。そこにはその家の主人の肖像画がかかっており、彼女には子どもの頃からなじみのある顔なのだが、画の下 の 碑文がどうしても読めない。しばらくしてエメリンは自分がこの家の主人だと言い出す。

Julia Briggs はこの短編を心理的幽霊小説と評し³⁰⁾、McCrosson は肖像画を “a death's head”³¹⁾ と言っている。確かに肖像画は死神かもしれないが、その顔はエメリン自身であろう。だからこそエメリンは親しみを感じながらも碑文が読めないのである—— 読めば自分の死を認めることになるからである。

この作品では最後にきて、実はすべて —— バスや古い家や肖像画など —— が夢の中で、エメリンは事故で重傷を負い、病院にいたことがわかる。一度病室で目ざめたエメリンは看護婦と話をするが、再び眠りにおちる。その後で再び目ざめるのか、もう二度と目ざめないのかは誰にもわからない。

さて、バスの窓ガラスに映ったもう一つの顔は一体何なのか。いつもと違うエメリン自身の顔 —— 事故で死にかけている血の気のない蒼ざめた顔ではないかと考えられる。そして乗っていたバスは彼女を死後の世界へ導くもので、足を踏み入れた鉄門のある古い家は死後の住居であったと推測できる。

以上の作品の窓に映る顔は一種の映像だが、次にあげる作品では、外を眺めている（と思われる）窓の内側にいる顔が、ガラスを通して外にいる人物の眼に入るという描かれ方をしている。

“Pigtails, Ltd.” の主人公ローリングス嬢 (Miss Rawlings) は实际的な人物であるにもかかわらず、自分でもわからないままに、突拍子もない考え —— 小さな女の子を一人なくした —— が彼女の心に入りこんでしまう。そしてある朝、馬車に乗って、ふとある小さな古い家の上方の窓に眼をやると、窓のところにいる輝く黒い眼をした顔が彼女を見ているような気がした。だがそれは一瞬のことで、ローリングス嬢は後になって、自分が見たものは「自分の心の中から」 (“out of her mind”³²⁾) 浮かんできたのだと納得す

るのである。もしその通りなら、もともと心の中にあったものが外に出た（＝窓のところに見えた）のだから、また心の中へ戻ってきたことになる。実際その顔のことは彼女の記憶の中に永久にとどまる。それどころか窓のところに一瞬見えた顔は、ローリングス嬢が偶然目にした詩集の一行 —— “Fell in love with Barbara Allan.”³³⁾ —— と結びつき、一人の少女バーバラ・アランに成長する。そしてローリングス嬢は取憑かれたようにバーバラ・アランを捜し始める。彼女はありとあらゆる所を捜し、椅子から立ち上がるたびに表通りに面している窓の外を覗き、知人にはバーバラ・アランの家族について尋ねた。やがてローリングス嬢はバーバラ・アラン以外のことはほとんど何も考えられなくなり、ついに病気になってしまう。そしてとうとうバーバラ・アランを捜す新聞広告を出すに至る。広告を見て集まった30人の自称バーバラ・アランをひきとって、ローリングス嬢は死ぬまで楽しく暮らす。その心の一番奥の秘かな隅のところでは、ずっと一人の完全なバーバラ・アランを捜し続けるのである。

人間の心には、常に幸福という形のないものを求める気持ちがある。それがローリングス嬢の場合は、お下げの少女という姿で窓ガラスに現れたのである。それは恐らく、人生の中で一番幸福だったときの、世の中の苦労や醜さなど何も知らなかったときのローリングス嬢自身の姿であったのだろう。従ってこの作品の窓は、遠くに位置する心の鏡 —— 秘かな願望の現われと解釈できる。

“Miss Jemima” のスーザンは不思議な顔（妖精）に何度か出会うという体験をする。その中の一回は何と伯父の葬式の行われている教会の中でである。教会の東側の大きな窓には、何世紀も昔にできた深紅色や青や緑のステンドグラスがはめこまれていた。だがその一方の隅は何年も前にこわれて、明るい白いガラスで修繕してあり、そこから墓地で見た不思議な美しい顔が、教会の中にいるスーザンの方をまっすぐにじっと見おろしていたのである。スーザンは、その蒼ざめた美しい顔の冷たく微笑む唇が “Come away, come away!”³⁴⁾ とささやいているのを耳ではなく心で受けとめる。

この窓からスーザンを見おろす顔は何なのか、なぜ教会の中へ入ってこないのか、疑問はいろいろ生じるが、考えられる解答はその顔がスーザン自身だということである。事情があって離れて暮らしている母親に会いたい願望、伯父の死（4で述べた）から逃れたい気持ち、意地悪な家政婦ミス・ジマイマへの憎しみなどが入り混じって歪みつつあるスーザン自身の心の邪悪な部分が、形をなしてスーザンの前に現れたのではないだろうか。その顔が教会の高窓のステンドグラスからではなく、修繕されたガラスからスーザンを見お

ろしているのは、ステンドグラスがキリスト教徒にとって神聖なものだからである。なぜならステンドグラスは、旧約聖書の物語や、キリストの秘蹟や、聖徒たちの奇蹟を図像として表わしたり、天国のバラを象徴図形として表すことで、信徒に天国の至福のヴィジョンを垣間見させるためにつくられているからである。³⁵⁾

スーザンは不思議な美しさ故にその顔に心引かれていき、それはやがて全身の姿（女性であり、スーザンは“*She*”と呼んでいる）を見せる。その一方でスーザンは恐ろしさも感じ、“*She*”から逃げようとする。それは自分自身の心の邪悪な部分との闘いに他ならない。そして最後に“*She*”に出会った時に、スーザンは必死の思いで“*Oh, please, God; oh, please, God,*”³⁶⁾と言いつける。すると“*She*”は姿を消し、スーザンはなつかしい母と再会するのである。

ローリングス嬢の場合にも、スーザンの場合にも、自分が気づかない心の内面に潜んでいる何か、つまり自分だとは決して認めたくない自分自身（の一部）が、いつのまにか自分の中から抜け出し、窓から自分を見つめる顔になったのではないだろうか。二人は意識せずに、自己の深層心理を覗きこむという歓喜と畏怖に満ちた体験をしたと解釈したい。

7. 窓の中の人

窓にはもう一つの作用がある。ボルノウによれば、「窓をとおして眺めるとき、世界は遠方へと退き動いて行く。……窓枠と窓の十字状の棧はこうした作用を強めている。なぜなら、それらは窓をとおして見られたものを遠ざけ、周囲の世界から一定の断片を切りとり、そしてそれを『絵』にするからである。そのかぎりでは窓は、世界のこうして切りとられ、そしてひとまとまりになっている部分を理念化するものである。……窓の形で眺められたものは、無限に流れている周囲から切りとられ、そして純粋な形象性の水準へ高められるのである。（以下略）」³⁷⁾

以上のことを証明しているのが短編“*The Picnic*”である。カーティス嬢（Miss Curtis）は短い休暇を過ごす海辺で、遊歩道の向こうのはずれにある窓のところに座っていた見知らぬ男性に恋をしてしまう。カーティス嬢は散歩中にふと眼をあげて彼の顔を見たとき、窓際に座って外を向いているその男性は自分に微笑みかけ、何か月もそこで自分を待っていたように思えたのである。しかもその態度には本当の意味で紳士的なものが感じられた。その後何度か窓辺に座っている彼と出会ううちに、カーティス嬢は自分と彼の二人だけの

世界を心に描きだす。そして一方では彼女が彼を見つめ、微笑み返しても事態が少しも進展しないことに不安といらだちを感じ始める。しかし実際には、彼はカーティス嬢を少しも見ていなかったし、微笑みかけてもいなかった。彼は盲人だったのである。つまりすべてはカーティス嬢の一人よがりの思い込みであり、滑稽で悲しい片恋だった。ボルノウの言うように、カーティス嬢は窓辺の彼を周囲の世界から断片として切りとり、理想化した自分だけの絵にしてしまったのである。その絵はカーティス嬢が自分で作りだしたもののだが、いつのまにか彼女を支配してしまっていたのだ。

こうした窓の中の人間というモチーフは画家や詩人たちに好まれ、繰り返し扱われてきたものでもある。

おわりに

de la Mare の短編小説における様々な窓の作用と効果を分析してきたが、窓が家の眼として、鏡として、絵としてなど数々の役割を果たしていることが作品を通して実感できる。

窓は人間を「見つめ」、「見おろし」、「拒絶し」、「引きつける」。これらはすべて人間の眼と同じ機能である。また、窓は人間を「映し出す」。映し出される姿は客観的・理性的なこともあれば、主観的・幻想的なこともある。これは鏡やスクリーンと同じ機能であり、その映像が想像力や深層心理と深くかかわっていることは言うまでもない。

de la Mare は光のリアリズムを避け、月光や雪あかりに照らされた世界や黄昏時の出来事を好む。光は窓ガラスを通ることでその強さを緩和し、おぼろげに人や物を映し出す。時には光の屈折で、その映像が歪んでいたり、影をおとしていることもある。それは de la Mare のゴシック的雰囲気をもつ世界にふさわしい舞台装置と言える。

de la Mare にとって窓はそれ自体が魅惑と魔力をもつもので、作品の中で微妙な効果をもたらす装置である。彼の描く窓を通して、あるいは窓の中に、それまで気づかなかった物事の別な面や人間の内面を見ることが可能である。de la Mare がいかに窓を重要視しているかは、次にあげる “Selina’s Palable” の冒頭の一節がはっきりと証明している。

For Selina, every window in her small private world had a charm, an incantation all its own. Was it not an egress for her eye to a scene of some beauty, or life, or of

forbiddingness; was it not the way of light; either her own outward, or the world's inward? ³⁸⁾

《注》

- 1) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、大塚恵一・池川健司・中村浩平訳、『人間と空間』（せりか書房、1985）、p.150.
- 2) Doris Ross McCrosson, *Walter de la Mare* (New York, Twayne Publishers, Inc., 1966), pp.34 – 35.
- 3) ボルノウ、『人間と空間』 p.151.
- 4) *Ibid.*
- 5) Walter de la Mare, *Peacock Pie* (London, Faber and Faber Ltd., 1974), p.40.
- 6) Walter de la Mare, “Selina’s Parable,” *The Riddle and Other Stories* (London, Selwyn and Blount Ltd., 1923), p.90.
- 7) Walter de la Mare, “Alice’s Godmother,” *Broomsticks and Other Tales* (London, Constable and Company Ltd., 1925), pp.328 – 329.
- 8) ボルノウ、『人間と空間』 p.151.
- 9) *Ibid.*
- 10) de la Mare, “Broomsticks,” *Broomsticks and Other Tales*, p.124.
- 11) de la Mare, “The Looking Glass,” *The Riddle and Other Stories*, p.63.
- 12) de la Mare, “The Dutch Cheese,” *Broomsticks and Other Tales*, p.39.
- 13) *Ibid.*
- 14) de la Mare, “Miss Jemima,” *Broomsticks and Other Tales*, p.60.
- 15) de la Mare, “The Count’s Courtship,” *The Riddle and Other Stories*, pp.53 – 54.
- 16) Walter de la Mare, “The Princess,” *Some Stories*, (London, Faber and Faber Ltd., 1962), p.160.
- 17) de la Mare, “Alice’s Godmother,” p.316.
- 18) de la Mare, “Lucy,” *Broomsticks and Other Tales*, p.141.
- 19) *Ibid.* , p.142
- 20) *Ibid.*, pp.148 – 149.
- 21) *Ibid.*, pp.170 – 171.

- 22) *Ibid.*, pp.171 – 172.
- 23) McCrosson, *op. cit.*, p.34.
- 24) Walter de la Mare, “Physic,” *The Wind Blows Over*, (New York, Books for Libraries Press, 1970), p.70.
- 25) *Ibid.*, p.71
- 26) 川崎寿彦、『鏡のマニエリスム』（「研究社選書1」研究社、1982）p.37.
- 27) de la Mare, “‘What Dreams May Come’,” *The Wind Blows Over*, p.13.
- 28) *Ibid.*, p.14.
- 29) *Ibid.*, p.16.
- 30) Julia Briggs, *Night Visitors: The Rise and Fall of the English Ghost Story* (London, Faber and Faber Ltd., 1977) p.147.
- 31) McCrosson, *op. cit.*, p.36.
- 32) de la Mare, “Pigtails, Ltd.,” *Broomsticks and Other Tales*, p.7.
- 33) *Ibid.*, p.9.
- 34) de la Mare, “Miss Jemima,” p.62.
- 35) 川崎寿彦、『鏡のマニエリスム』 p.146.
- 36) de la Mare, “Miss Jemima,” p.75.
- 37) ボルノウ、『人間と空間』 p.153.
- 38) de la Mare, “Selina’s Parable,” p.90.